



# ななかまど Vol.39



写真：平成19年2月に竣工した学生寮。上から時計回りに、全景、ラウンジ、飲料・スナックの自動販売機、共同調理場、洗濯室、採光にあふれた居室（2枚）。



## 目次

■ 学位記授与式告示.....02～03	■ ITクラフトマンシップ実施報告...14～15	■ 情報処理学会全国大会に参加して.....24
■ 学位記授与式.....04	■ 新さっぽろ冬まつりに映像作品提供.....16	■ 北海道映像コンクール学生部門賞受賞.....25
■ 退職教員あいさつ.....05	■ 「江別の冬を楽しもう」に参加.....16	■ 中国短期研修.....26
■ 学生寮竣工.....06	■ 学生相談室が講演会実施.....17	■ ホームページコンテスト結果発表.....27
■ 企業説明会東京会場実施.....07	■ 平成18年度公開講座終了報告.....18～19	■ ビジネスプレゼンテーションコンテスト発表会...28
■ 教員FDプログラム関連記事.....08～09	■ 国際会計基準審議会の特別講演会実施...20	■ 学生実行委員会紹介.....29
■ 平成18年度「学生による授業評価」...10～11	■ 同窓生のページ.....20	■ ゼミ紹介.....30
■ 町村信孝先生特別講演会開催.....12	■ 観光もITの時代へ.....21～23	■ 学生サポートセンターより.....31
■ 功労OBの集いを実施.....13	■ 情報処理学会で研究発表.....24	■ 主要行事等.....32





## 平成18年度 卒業証書授与式告辞

学長 井野 智

本日、ここに、電子開発学園松尾泰理事長、グループ各社代表の方々、前学長久野光朗先

生、前事務局長今田末吉様、同窓会長木村篤詩様、保護者の会会長指本陽子様をご来賓としてお迎えし、教職員臨席のもと、767名の新学士と、14名の大学院修士課程修了者に、学位記をお渡しすることができました。

めでたく本日を迎えました皆さんと、ご家族の皆さんに、北海道情報大学を代表して心よりお慶び申し上げます。

### 1 記念すべき学位記授与式

平成元年に開学した北海道情報大学は、昨年9月までに通学課程3,333名、通信教育課程6,210名、合わせて9,533名の卒業生を輩出しています。皆さんは、今、本学の卒業生が初めて10,000名を超える記念すべき学位記授与式に臨んでいます。

### 2 卒業生の社会的評価

国際情報化の動きが加速するなかで、「情報」を核にその応用範囲を広げてきた「情報の総合大学」らしく、多くの卒業生が高度情報通信社会の中心的担い手として幅広い分野で活躍しています。

本学は、毎年2月にIT関連企業の人事担当者をお招きし、次年度卒業予定者の採用を依頼する大学説明会を東京で開催しております。回を重ねるごとに盛況をきわめ、先月19日開催の説明会には260社から340名近い参加がありました。採用実績のある企業からは「一人でも多く採用したい」、採用実績の

ない企業からは「今年こそ是非採用したい」との有難い申し込みが相次ぎ、あらためて本学に対する実業界の期待の大きさを知りました。

### 3 苦学した卒業生の活躍

実業界における本学への高い評価は、卒業生の皆さんが期待に違わぬ活躍をしている何よりの証拠であります。本学の実践的な専門教育と、情報に付加価値を生み出す幅広い教養やモラルを育てる全人教育の成果に加えて、苦学、苦学、苦学と書く「苦学」を学生時代に体験していることが、本学卒業生の活躍を支える大きな力になっているように思います。

「苦学」本来の意味は「働いて学資を作りながら学ぶこと」ですが、広義に解釈すると「勉学は苦手だが将来のため最後まで諦めずに頑張った」、「クラブ活動や実行委員会活動と学業を両立した」、「教職課程の単位を上乗せするなど、卒業要件を度外視した高いハードルを自らに課した」、通信教育課程では「一般社会人として仕事と学業をみごとに両立した／正科生A」、「専門学校と大学の併学に挑戦した／正科生B」など、皆さんは様々な「苦学」の末に学士または修士の学位を手にしたはずです。

恵まれた環境よりも、厳しい環境が強さを生むのは、自然界のならいです。

どんな仕事も最後までやり遂げるのがプロ、さまざまな苦しさを克服し卒業へと漕ぎつけた強い意志の力を信じ、実社会では思う存分活躍してください。

### 4 よりよき人生を送るために

苦学が、皆さんの「生きる強さ」を育ては



しましたが、反面、学生の特権ともいうべき“読書やスポーツや遊び”に打ち込む時間が十分なかったのではと危惧しています。

IT分野の企業はたいへん人手が不足しており、入社早々、忙しい仕事が皆さんを待ち受けていることでしょう。仕事が忙しいのはたいへん結構なことですが、“忙”という字は、心を亡くすと書きます。これは「人は忙しいと、心のゆとりを失い易い」ことを示す表意文字であり、心のゆとりを失うと、“読書やスポーツや遊び”を楽しむ気になれませんか、他人（ヒト）や自然に対する優しい思いやりも生まれてはきません。

ハンドルに遊びがあるから、滑らかなハンドル捌きができることはドライバーなら誰もが知っています。忙しくて、遊ぶときは徹底的に楽しむという心のゆとりがなければ、決して良い仕事はできず、長く勤めることもできません。

一時、テレビCMに使われ有名になった「強くなければ生きてはいけない、優しくなければ生きる資格がない」は、アメリカの作家レイモンド・チャンドラーの言葉です。

忙しくとも、遊び心を忘れず、のびのびと人生を送るためには、誰にも平等に与えられている時間の無駄遣いを少しでも減らすよう心がけることが肝要です。

時間の無駄遣いの最たるモノは病気、くれぐれも健康に留意し、かけがいのない貴重な人生を、健やかに、豊に生きぬいてください。

## 5 学長退任にあたって

最後になりますが、私は、今月限りで学長を退任いたします。

教職員ならびに卒業生の皆さんにお話して

きる最後の機会ですので、北海道情報大学への思いを述べたいと存じます。

皆さんが、2年生と4年生の時に「学生による授業評価」アンケート調査を実施しました。残念ながら、授業に対する満足度はそれほど高いものではありませんでした。

全国規模で最初に学生の満足度調査を実施したリクルートという会社は、大学満足度に与える影響要因を「教育内容」「学生生活」「(学内の)人間関係」に分類し、「人間関係」がもっとも支配的であると報告しています。このことから、私は学長就任以来“人間的な温かみのある大学づくり”をモットーに、すべての学生が社会で活躍できる力をつけ、「この大学で学んで良かった」と誇りをもって卒業し、卒業後も頻繁に訪れたくなる大学にしようと、学生・教職員全員に呼びかけてきました。

責任ある職業人養成を使命とする本学にとって、教育面での安易な妥協は許されませんが、学生生活や人間関係の改善は本学が真剣に取り組むべき緊急の課題だと思います。大学の本当の評価は、学生の満足度ではなく、卒業生が社会で活躍し、社会的に如何に評価されているかにかかっています。2年後、20周年の節目を迎える北海道情報大学が、名実ともに伝統と歴史に輝く大学として社会的な評価を得るため、なによりも卒業生自身のために、本日、学位記を手にした皆さんの今後の発展と健闘を期待し、学長告辞のむすびとします。

卒業生ならびにご家族の皆さん、本日はまことにおめでとうございませう。

平成19年3月16日



## 平成18年度 学位記授与式

3月16日(金)午前10時から、本学松尾記念館講堂において、平成18年度北海道情報大学学位記授与式が行われました。

経営情報学部第15回、情報メディア学部第3回、通信教育部第10回、大学院第10回の合同で行われた式の模様は、会場に設置されたテレビカメラ4台により、保護者控室の201教室と204教室、そして全国の各教育センターに中継されました。

式は、厳粛なうちにも和やかな雰囲気の中に行われました。その後、卒業記念写真撮影、学科等別学位記授与、体育館での卒業祝賀会と続き、学位記を手にした卒業生・修了生たちは、大学との別れを惜しんでいました。

なお、学科等別学位記授与では、成績優秀者等の学生表彰も併せて行われました。



祝辞を述べる松尾理事長



各学科等の代表に学位記を授与

- 卒業生
  - ・経営情報学部
    - 経営学科・経営ネットワーク学科 88名
    - 情報学科・システム情報学科 89名
  - ・情報メディア学部
    - 情報メディア学科 162名
  - ・経営情報学部 通信教育部
    - 経営学科・経営ネットワーク学科 54名
    - 情報学科・システム情報学科 374名
- 修了生
  - ・経営情報学研究科 14名  
(総務課)





## 退職教員あいさつ

## 貴重な体験に感謝して



HCS校長  
石井 詩都夫

縁あって北海道情報大学の教職課程で7年9カ月お世話になり、大変貴重な経験をさせていただきました。

思い出しますと、過程ができた当初の取得単位数は64単位が最低限度であり、中でも開設時の3年次の学生にとっては専門ゼミを受けながら教職の必須単位をとり、教育実習校の依頼をし、1年後には教壇に立つというあわただしさの中での推移でした。特に「締切りが過ぎた」とのことから、母校での教育実習校の決まらない全国16名の学生(含通教部)の実習校探しは、難を極め、道府県の知人を頼りやっと決定という経過であった。なかでも、福岡教育センターの学生が美幌農業高校で実習できたのも道教委のご理解と温かいご支援の賜物と感謝している次第でございます。開講当時、一人ひとりの学生の学習意欲は目を見張るものがあり、教員としての意気とやりがいを感じたことが懐かしく思い出されます。

また、通信教育部を担当させていただき、事務部次長を初め職員の方や先生方と和気あいの雰囲気の中で業務を推進させていただきましたし、各センターと交流を深めることができました。当時は、夜の交流会で親交を深め、担任の先生方から生の情報をいただき、楽しいスクーリングに花を添えることができ、今こうして札幌教育センターでスムーズに仕事できたのもそのお陰と思っております。

このような貴重で沢山の思い出を作ることができましたのも、本学に赴任することができた幸運にありつけたお陰と感謝するのみでございます。

最後になりましたが、北海道情報大学がますます専門性を高め、地域社会に貢献しながら、発展していくことを祈念いたしております。ありがとうございました。

## トポスの窓から



情報メディア学部 教授  
羽田野 正隆

私は情報メディア学部が開設された翌年にまいりましたから、この3月で5年間勤めたことになり、あわせて定年を迎えることとなります。省みて短いようで、多くの出会いや思い出に恵まれた時間であったと感謝しています。

私の学んできた地理学は地図と切り離せませんが、近年地図の作成自体は、地理情報システム(GIS)として独自の発展をしつつあります。その技術や成果を用いて、場所(トポス)や地域そして世界について考えること。それが本学における私の役割でした。さいわいキャンパスの前面は江別市街を載せる段丘(テラス)に臨み、背面は緑多き野幌の丘陵を控えていることから、この利点を生かして、しばしば学生とフィールド調査に出かけ、観察や記録の大切さを学びました。それらの中で、調査に携行する全球測位システム(GPS)の測器と同じ原理による国土地理院の定点観測塔が、野幌中学校の校庭にあること見つけたときや、日本の植生図でブナ林の自生北限について学んだ後、これを越えて開拓民が植えたブナ林(いわゆる望郷樹)が近くの千古園にあることを確かめたときは正直感動したものです。また演習では、代表的なソフトを用いて各種の地域データを地図化し、それらの意味について考えることが中心でしたが、その際、情報が現実と遊離しないよう心がけたつもりです。このように書くと、何か優等生的な印象ですが、実際には、データとソフトとマシンの間で苦闘することもしばしばでした。そのような壁をいくつも乗り越えて、ここに卒業できるのは、ひとえに教職員各位の温かい支えのたまものと、いまその喜びをかみしめています。

ビバ 情報大! ビバ テラス!



## 学生寮竣工式執り行われる



玉串を受け取る松尾理事長

去る2月28日(水)午前11時より、学生寮の竣工式が盛大に執り行われました。松尾泰理事長出席のもと、竣工式は無事終了。その後、直会が行なわれ、挨拶に立った松尾理事長より「学生寮完成の慶びと、本大学の発展を期したい旨」の挨拶がありました。

この学生寮の完成により、男子学生用80室が整備されました。



直会であいさつする松尾理事長





## 平成18年度 北海道情報大学企業説明会

平成19年2月19日(月)東京中野サンプラザで北海道情報大学説明会を実施いたしました。この説明会の目的は、首都圏に本社がある企業に対し、



あいさつする松尾理事長(上)と井野学長



本学の教育内容の説明と、学生の研究発表を通して、本学が目指す方向を理解していただくことです。

説明会は松尾理事長の挨拶に始まり、井野学長の挨拶、嘉数副学長から大学の取り組みとして、文部科学省に採択された「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム(現代GP)」選定プロジェクト「ITによるIT人材育成フレームの構築ー学習者適応型e-

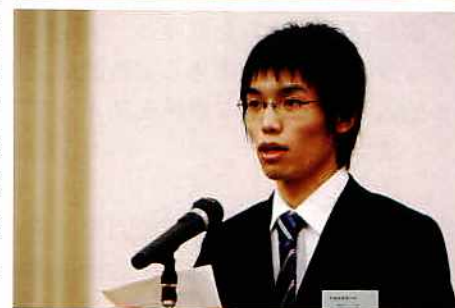
Learningシステムの開発ー」、経済産業省に採択された「ITクラフトマンシップ・プロジェクト」ポータルクリエイター育成プログラム、新設した医療情報学科の状況などを報告いたしました。

引き続き、学生の研究発表として経営ネットワーク学科4年鈴木孝史君から日経パソコンによる全国ランキング「e-都市ランキングでなぜ長沼町が上位かー全国の町、全道で1位の理由ー」、システム情報学科4年居内寛貴君から情報処理北海道シンポジウム2006で発表し、情報処理学会北海道支部より技術研究賞を受賞した「高速IPパケット解析エンジンの開発」を発表いたしました。その後、情報メディア学科4年新林辰則君と通信

教育部鹿児島教育センター4年末吉洋明君から卒業生代表の挨拶を行いました。

休憩を挟み、独立行政法人 情報処理推進機構ソフトウェア・エンジニアリング・センター所長鶴保証城氏から「ソフトウェア産業の課題と大学教育ー見えるソフトウェア開発の標準化ー」と題して特別講演を行っていただきました。

参加された企業数は262社、参加者は340名でした。参加された方からは研究教育内容がよく理解できたと好評でした。



研究発表する鈴木君(上)、居内君と卒業生代表としてあいさつする新林君



会場全体の様子



# 「次世代IT人材育成を目的としたFDプログラムの開発」の成果報告

経営情報学部 教授 森澤 好臣

「ななかまどVol.38」で紹介したファカルティ・ディベロプメント(Faculty Development)プログラムの詳細およびFDプログラムで開発した教育訓練プログラムの実施状況をお知らせします。

産業界が求めるITに関して基本的知識に加えて実務知識及び実務スキルをも備えた即戦力になる学生を育成するために、その教育に係わる教育者は実際の産業界で要求されるIT技術に関する知見・ノウハウを習得する必要があります。今回のFDプログラムは、教員が企業の現場におもむきインターンシップを受けることによって、現場で実際に何が起きているのか、現場での問題解決方法、納期やコスト制限のある実仕事に対するグループでの仕事の仕方といった実践的な知見・ノウハウを習得することです。この知見・ノウハウをベースに産学が協同して大学院生向けの教育訓練プログラムを開発し、大学院修士課程カリキュラムに企業が求める実践的なスキルの習得を目的とした実践的な講座を加えることを目的としています。

高い実践的なIT技術力を保持する情報系専攻の学生の輩出を目指し、連携機関の協力により北海道情報大学の教員7名に対して、6つのFDプログラムを実施しました。教員が連携機関での1~2週間のインターンシップを通して、次世代のIT技術習得と大学院生向けの教育訓練プログラムを開発しました。FDプログラムの名称と参加した先生および連携機関を次に示します。

- ① 実践アジャイル開発論 (谷川健先生と山北隆典先生、連携機関：(株)エスシーシー)
- ② 実践情報セキュリティシステム論 (中島潤先生、連携機関：(株)コムワース)
- ③ 実践システム設計・開発・管理論 (斎藤一先生、連携機関：日本ユニシス(株))

- ④ 実践医療情報システム開発論(向田茂先生、連携機関：江別市立病院)
- ⑤ 次世代コンピューティング論 (長尾光悦先生、連携機関：新日鉄ソリューションズ(株))
- ⑥ 実学・サービスビジネス論(中村忠之先生、連携機関：日本アイ・ビー・エム(株))

開発した教育訓練プログラムを検証するために、FDプログラムを受講した中島先生を講師として、開発した教育訓練プログラム「実践情報セキュリティシステム論」を10名の学生に対して平成19年1月に集中講義の形式で実施しました。極めて実践的な内容の実習を中心にしたことで、理論と実践が結びついたと感じる学生が多く見受けられました。また、受講者全員が積極的に参加し、実習に非常に意欲的に取り組んでいたことから、今回開発した教育訓練プログラムの教育的効果は非常に大きいものと判断しています。

開発した6つの教育訓練プログラムは、FDプログラムを受講した教員を講師として連携機関の協力を得ながら北海道情報大学大学院修士課程の正規課程授業として順次開講いたします。平成19年度以降に次々と開講される実践的な次世代ITの講座を期待してください。





# 平成18年度 冬季FD研究会 「授業をよくする方法について」の報告

経営情報学部 教務委員長 林 雄二

北海道大学のFD活動の中心的な立場で活躍されている細川敏幸教授(北海道大学高等教育機能開発総合センター)を講師にお招きして「授業をよくする方法について」というテーマで講演をしていただきました。なお、FD(Faculty Development)という言葉は、教育向上に向けた教員の組織的な取組という意味で一般に使われています。

日時：2007年2月27日(火)13:50より 約1時間半  
場所：北海道情報大学 115教室  
出席教員数：44名

講演は、1) 北海道大学におけるFDの取り組み、2) 授業改善のための一般的な留意事項、3) 北海道大学における授業改善の事例の3つから成っていました。以下に内容をまとめておきます。

## 1. 北海道大学におけるFDの取り組みの状況

北海道大学では、全学のFD研究会を、一泊二日のワークショップ形式で行っている。小グループに分かれて、シラバスの作成に取組むことが多い。シラバスは学生と教員の契約書であり、学生との約束をお互いに守ることが、授業運営において重要である。

北海道大学では教員数が多いので、FD研究会が各学部を代表した参加したメンバーから構成されているとのことで、講演後細川先生は、本学のように全教員を対象として開催できるのは恵まれていると話されていました。

## 2. 授業改善のための一般的な留意事項

教員として講義に向かう基本的な心構えを話されました。多くの内容が含まれていましたが、いくつか、印象に残った項目を上げておきます。

- ①講義のはじめに自己紹介。アイスブレイキング(緊張をほぐす行為)が必要。
- ②教員が授業を楽しむこと(学生にも伝わる)。
- ③視聴覚教材を利用しても、説明には板

書を活かすこと(学生も間がとれる)。

- ④学生にできるだけ質問をさせる(一方通行にならないよう)。
- ⑤講義は一回限りの講演と考える(毎回それだけの準備が必要)。
- ⑥リラックスした雰囲気と秩序を(演習やグループ討論を盛り込んで)。

我々教員として、慣れてしまい忘れがちなことをあらためて再認識することができました。個々の教員それぞれに参考になることがあったのではないのでしょうか

## 3. 北海道大学における授業改善の事例

北海道大学では新入学生を対象に、フレッシュマン教育として大学の付属施設(演習林、臨海研究所など)を利用した一週間の泊り込み教育を実施していることが報告されました。

最後に、それぞれの科目で、興味を抱かせるための教材を用意することができるのではないかと話され、基礎物理で実際に提示している、ペットボトルやホースなどの身近な材料を使った振動や電磁誘導などのデモ教材を見せてくださいました。

以上、個々の教員が授業改善に取り組むためのヒント、大学としてのFD活動のヒントを得た有意義な研究会でした。





# 平成18年度「学生による授業評価」

## —アンケート調査集計結果速報—

学 長 井野 智

### 1. 授業アンケートについて

昨年本学は、平成16年度以来2度目となる『学生による授業評価』アンケート調査を行いました。

目的は授業に対する学生の意見・評価を聞き、授業が学生にどう受け止められ、学生の成長や啓発にどう貢献しているかを把握し、その結果を今後の授業改善に役立てることにあります。

学部の体育実技とオムニバス形式の講義を除く全授業、大学院の全授業および通信教育部における全対面授業を対象とし、前期が7月、後期は12月に調査が実施されました。

回収件数は前期12,164、後期9,098でしたが、前回調査の集計結果速報(学内報第33号)と同じように、ここでは、学部のみを取り上げ、ゼミ形式の授業を除く前期9,634枚、後期6,959枚の集計結果について概述したいと思います。

### 2. 集計結果について

前期および後期に回収した全調査票を講義科目(14,566件)と演習科目(2,027件)に分けて集計すると表1～4に示す結果が得られました。

表1は履修の動機、表2～4は質問事項を授業に対する姿勢、授業評価、総合的評価の3つに大別し、細目ごとに肯定的回答がどの程度あったかを百分率(%)で示したものです。評価区分は5段階としました。どの区分を肯定的回答とするかは表中に示したとおりです。例えば、設問「この授業の内容に興味・関心を持つことができた」に対する選択肢を「よくあてはまる：評価点5」「ある程度あてはまる：4」「どちらともいえない：3」「あまりあてはまらない：2」「まったくあてはまらない：1」とし、評価点が5または4の選択肢を肯定的回答としました。

表1～4の数値は講義科目の分、( )内は演習科目の分です。参考までに、前期分を併せて載せましたが、前後期あわせた場合と大差のないことがわかります。細部にわたるコメントは省き、以下本報では、総合的な評価の最終項目「全体的な満足度」のみを取り上げ、少し詳しく述べることにします。

### 3. 前回と今回の評価の差

授業に対する学生の「全体的な満足度」(以下「満足度」と略記)の肯定的回答率は、講義科目が49.1%(前回46.7)、演習科目は55.0%(前回62.0)でした。講義科目は2.4%前を上回っているものの、演習科目が7.0%も下落しているのが気になります。演習科目

の「満足度」の低下は、たぶん、新旧カリキュラム併存によるもので、新カリキュラムにおける一部演習科目の必修化と低学年開講が大きく影響しているように思います。

### 4. 前期と後期の評価の差

表4によれば、いずれの評価項目においても、前後期の肯定的回答率が前期分を上回っており、前期よりも後期の評価が高いことがわかります。

本誌には載せていませんが、後期の「満足度」の肯定的な回答率は、講義科目51.6%、演習科目59.9%でしたので、講義科目で4.3%、演習科目では8.9%の改善が見られました。

評価が上がる理由として、通年科目受講生の後期脱落と教員による後期授業の改善が考えられますが、前回調査時の改善度が講義科目2.1%、演習科目で-5.0%だったことを考えると、前期の評価結果を踏まえた担当教員の授業改善によるところも少なくないように思います。

### 5. 学生の属性別評価結果について

「満足度」に対する肯定的回答率の差が5%以上あった属性は次の通りです。

(1) 所属学科 学科による「満足度」の違いは大きく、講義科目では経営ネットワーク学科が医療情報学科より11.1%高く、演習科目は逆に後者が前者を10.7%上回り、他の2学科は両者のほぼ中間。

(2) 学年別 講義科目では低学年ほど満足度が低く、1年生と4年生の差は6.1%。演習科目では4年生が高く、満足度最低の2年生との差は14.8%。

(3) 入試区分別 講義科目では一般2期が最高、一般1期が最低で、差は16.7%。演習科目ではセンター入試が最高、AO入試が最低で、差は10.2%。

(4) 必修・選択必修・選択別 講義科目では選択が最高、最低の必修との差は8.8%。演習科目では選択必修が最高、最低の必修との差は14.5%。

(5) 教養・専門別 講義科目に大差はないが、専門の演習科目に対する満足度が6.1%高い。

(6) 履修人数別 履修者数が少ないほど満足度は高く、50人以下と101人以上の差は、講義科目で7.6%、演習科目で25.1%。

### 6. 教員の属性別評価結果について

「満足度」肯定的回答率の差が5%以上ある属性は次の通りです。

(1) 年代別 教員の年齢を30代以下、40代、50代、



60代以上に分けると、講義科目に対する満足度は40代が最高で、30代以下、50代、60代以上の順に満足度は下がる。40代と60代以上の差は15.2%。演習科目では年代が上がるほど満足度は低下し、30代以下と60代の差は15.9%。

(2) 専任・非常勤別 前は講義科目で4.0、演習科目で7.8非常勤教員に対する満足度が高かったが、今回は講義、演習ともに僅少ながら専任が非常勤を上回った。

#### 7. 今後の課題

授業評価には、授業改善の情報源、授業の評価資料という大きな活用目的があります。そのためには、十分な分析を多角的に行う必要があることは言うまでもありません。事業報告は年度内にという学内報

の編集方針に従い、紙幅と執筆時間の関係から、評価項目は「総合的な満足度」、分析に用いた指標は「肯定的回答率」のみという、皮相的、一面的報告となってしまいました。

前は特に評価の低かった専任教員に対し反省を促すに止めたのですが、今回は全ての専任教員に担当科目ごとに調査票と集計結果をお渡しし、評価に対する所感と今後の授業改善計画などを記したレポートを提出していただきました。その成果は集計結果の端々に見受けられます。膨大な時間と経費とエネルギーを費やした調査が無駄にならぬよう、学生諸君には授業に臨む姿勢を正すことを、教員の皆様には授業改善に向けて一層努力されることを、期待したいと思います。

表1 受講の動機

動機	前期 ( )内演習科目	前後期 ( )内演習科目
必修科目だから	39.1 (39.9)	36.8 (35.6)
資格取得に必要	1.8 (3.1)	1.5 (2.4)
講義概要を読んで興味を持った	13.7 (17.7)	13.6 (19.8)
先輩や友人から勧められた	1.1 (0.6)	1.0 (0.9)
授業時間割の関係	16.9 (11.9)	17.8 (13.1)
将来に役立つそう	7.1 (11.5)	6.9 (11.5)
単位がとりやすいと思った	4.2 (2.2)	4.9 (3.2)
あまり深く考えないで選んだ	12.8 (9.9)	14.1 (10.7)
その他	2.0 (2.2)	2.0 (1.7)
無回答	1.3 (0.9)	1.5 (1.2)

注1：表1の数値は講義科目受講動機百分率%、( )内は演習科目

注2：表2～4の数値は講義科目の肯定的回答の百分率%、( )内は演習科目

表2 学生の授業に対する姿勢

調査項目	肯定的回答の範囲	前期 ( )内演習科目	前後期 ( )内演習科目
出席状況	全回出席、1～2回欠席	77.4 (84.6)	74.3 (82.0)
自主学习時間	1時間以上、少しはする	51.7 (61.1)	54.4 (62.8)
意欲的に取り組んだ	とてもそう思う、ある程度そう思う	50.1 (69.8)	51.5 (70.3)
私語・メール	ほとんどしない、あまりしない	64.1 (58.4)	64.4 (56.2)

表3 授業に対する学生の評価

調査項目	肯定的回答の範囲	前期 ( )内演習科目	前後期 ( )内演習科目
興味・関心を持つことができた	よくあてはまる、ある程度あてはまる	51.8 (67.1)	53.6 (68.7)
わかりやすかった	同上	46.5 (40.8)	47.9 (45.1)
ものの見方等に影響を受けた	同上	35.2 (49.0)	37.1 (54.1)
意欲・熱意が感じられた	同上	57.5 (45.4)	58.7 (51.1)
聞き取りやすかった	同上	52.1 (35.8)	53.4 (41.5)
板書等が見やすかった	同上	45.0 (56.5)	46.6 (59.3)
興味を促す工夫がされていた	同上	35.2 (34.3)	37.8 (37.3)
テキスト・機材等が有効に使われていた	同上	52.7 (64.6)	55.4 (68.9)
私語等に注意や指導がなされていた	同上	44.0 (42.7)	45.9 (46.5)
質問や意見等に親切に対応していた	同上	54.8 (46.4)	57.4 (49.0)
教室の広さや設備は適切であった	同上	59.2 (38.6)	60.0 (41.4)
宿題や勉強方法等が指示されていた	同上	40.7 (65.5)	43.1 (68.8)
最新の研究成果等に触れることができた	同上	29.4 (61.4)	32.0 (62.8)
授業目的である知識等を獲得できた	同上	40.1 (54.2)	42.1 (54.9)
自分の将来に役立つと思う	同上	47.5 (58.3)	48.4 (59.7)

表4 授業に対する学生の総合的な評価

調査項目	肯定的回答の範囲	前期 ( )内演習科目	前後期 ( )内演習科目
授業の進度	ちょうどよかった	67.9 (52.2)	69.1 (56.3)
難易レベル	同上	49.1 (35.8)	49.5 (37.3)
授業担当教員の教授技術	非常に優れている、ある程度優れている	45.3 (47.1)	47.8 (50.4)
全体的な満足度	とても満足、ある程度満足	47.3 (51.0)	49.1 (55.0)



## 町村 信孝先生 特別講演会開催 「北海道・日本・世界」

12月18日(月)、松尾記念館講堂において、衆議院議員 町村 信孝先生による特別講演会「北海道・日本・世界」が開催され、学生、市民、教職員合わせて約400名が参加しました。

町村先生は江別市出身で、また、お祖父様が札幌農学校出身という由縁もあるため、講演会では、同学校出身の著書『武士道』で有名な新渡戸 稲造や、キリスト教思想家・内村 鑑三について述べられ、札幌農学校の1期生・2期生は外国人教員からすべて英語で講義を受けていたことについて紹介されました。町村先生は、ご自身の大学時代のアメリカ留学時に経験した英語での苦労話を交えつつ、その時代に国際的な視野を持って、真摯に学問に取り組んでいた人物がいたことに感銘を受けたとお話されました。

ほかにも、これまでに文部科学大臣や外務大臣を歴任したご経験から、大学等の高等教育機関が現在抱えている問題や、世界に対して果たすべき日本の役割等、様々なトピックについてご講演いただきました。

また、大変な激務だったという外務大臣時のエ



「北海道・日本・世界」について語る町村先生

ピソードから、これから社会へ巣立っていく会場の学生に対し、社会人は体力があることが重要であるとアドバイスされ、学生も熱心に耳を傾けていました。

質疑応答では、学生から、「日本人の長所・短所はどこだと思うか」、「仕事のやりがいは何か」という質問がされ、日本人の長所は自然と備えている「武士道」であり、短所は自己主張が苦手であること、また、仕事のやりがいについての質問には、ご自分の仕事によって人が喜ぶ顔を見ることが出来た瞬間に、一番やりがいを感じると答えていらっしゃいました。

講演会の最後には、女子学生2名による花束贈呈が行われ、盛大な拍手とともに町村先生は会場を後にし、約1時間半に及ぶ講演会が無事終了致しました。

(総務課)





## 功労OBの集い

去る平成18年12月1日、本学を定年及び任期満了等により退職された教職員を対象に、功労OBの集いが行われました。本学の発展に尽力された労をねぎらい、現教職員と相互の親睦をはかるため、井野学長が発起人となり、32名のOBのご案内しましたところ、元教員8名、元事務職員4名の12名が出席されました。

OB到着後は、学内見学が行われ、大学院生室や新校舎、松尾記念館実習室、メディアスタジオ、図書館、講堂などを見学しました。開学当初、本部棟1階の広報室とその向かいの研究室辺りにあった図書室が、現在は松尾記念館に移って図書館となり、今では蔵書数が10万冊を超える規模になったことや、最新のコンピュータやモーションキャプチャー等の実習設備も充実していること、また、以前は体育館で行っていた入学式や卒業式などの式典が、現在は講堂(600人収容)で行われていることなど、パンフレットやホームページなどで知ることが出来ますが、実際にご覧いただき、19年目を迎える本学の現状を知っていただく良い機会になりました。

学内見学の後は、厚生棟2階のカフェテリアに移動し、懇親会が行われました。現教職員からは、教員管理職のうち10名と、中居事務局長、中島法人事務局長、風間事務局長次長、本学を卒業した1期生で現在入試課の古賀係長と大学院課の山隈係長が出席し、かつてOBと交流のあった教職員が揃いました。井野学長からの挨拶では、中国南京大学及び米国カリフォルニア大学サンタクルーズ校との国際交流の現状や、医療情報学科の新設、文部科学省から採択された現代GPとそのフォー



ラムの開催や、一般市民等を対象とした公開講座の実施状況、学生寮の増設など、大学の現状について報告がありました。

この集いの開催をととても楽しみにされていた初代学長の木下重教先生は、あいにく欠席されましたが、代わって、大野公元学長からOB代表の挨拶があり、OBの集い開催の謝意が述べられ、今後も大学の発展に陰ながら力になりたいとのお言葉をいただきました。

続いて、今田末吉前事務局長の乾杯の発声で懇親会が始まり、それぞれの席では、開学当初の苦労話や、当時の同僚の消息なども聞こえ、会は和やかに終わりました。

(総務課)





## 経済産業省委託事業

# 「ITクラフトマンシップ・プロジェクト」実施報告

### ITクラフトマンシップ推進委員会

委員長：嘉数侑昇

委員：齋藤 一、中島 潤、長尾光悦、向田 茂

「ITクラフトマンシップ・プロジェクト」は、経済産業省が平成17年度より実施している初等中等教育段階の児童生徒(小中高)向けのIT技術教育訓練プロジェクトです。このプロジェクトは、ITに対する意識を啓発すると同時に高度な技術を学ぶことのできる場を提供し、コンピュータ・サイエンティスト、スーパー・プログラマーといった専門家となり得る人材を継続的に輩出できる環境を整備していくことを目的としています。平成18年度は全国で15件が採択され、その一つとして、本学の「ポータルクリエイター育成プログラム」が採択されました。

本学が実施した「ポータルクリエイター育成プログラム」は、ポータルサイトと呼ばれるWebサイトを構築するための一連の技術を学習するというものです。ポータルサイトは、Yahoo!やMSNのようなWWWへアクセスする際の玄関の役割を果たすWebサイトです。また、ポータルサイトの構築にあたっては、誰もがその

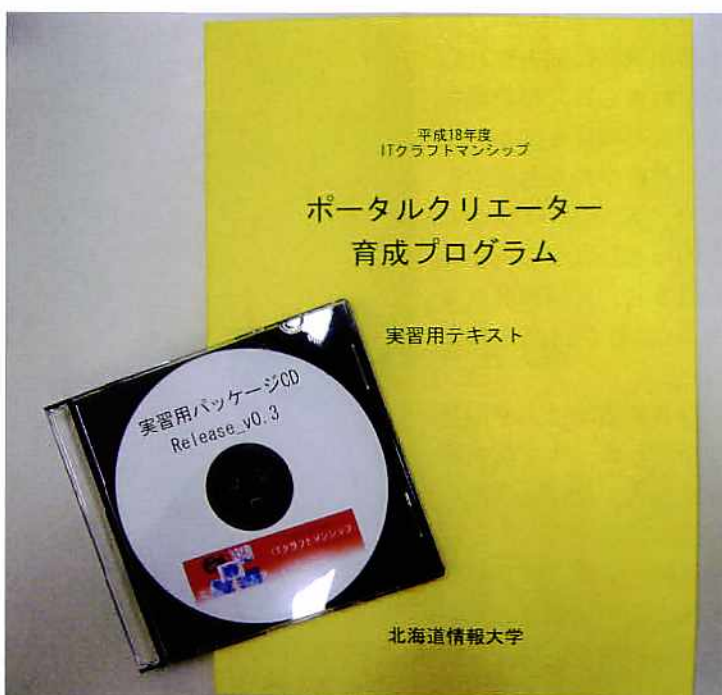


図1 実習用テキストとソフトウェアパッケージ

ソフトウェアの改良、再配布が行えるオープンソースソフトウェアを利用して行うということが本プログラムの特徴です。利用するソフトウェアは全てオープンソースソフトウェアであるため、実習のための専用テキストとソフトウェアパッケージを開発し、実習を行いました(図1参照)。このテキスト教材は、現在、ITクラフトマンシップ用のWebサイトにて、eラーニング教材として一般公開しています(<http://ite.do-johodai.ac.jp>)。

実習は平成18年11月4日から25日まで毎週土曜日、計4日間に渡って実施されました。参加者は、江別近郊の高校生を中心に、遠くは旭川からの13名の高校生が参加しました(図2参照)。

実習の内容は、Linuxのインストール、ネットワーク設定、Webサーバ構築、



図2 実習風景



図3 最優秀ポータルサイト (温泉.net in北海道)



XOOPSによるポータルサイトの設計・構築・デザインと多岐にわたり、かつ、高度なものでしたが、参加した高校生は、実習の回数を重ねるたびに技術力を向上させていきました。実習では、各参加者による独自ポータルサイトの創作までを実施しました。また、実習の最終日には創作ポータル

の講評会を行い最優秀作品を決定しました(図3参照)。高校生は積極的に実習に取り組み、我々の想像以上の速さで技術を吸収し、完成度の高いポータルサイトを創作したことに驚かされました。

本プロジェクトでは、受講者の技術力の向上を定量的に把握するために、ITSSスキル標準の知識

項目に準拠したアンケート調査を行いました。アンケートは、「Webサーバとはどのようなものかわかりますか」、「データベースとはどのようなものかわかりますか」といった内容の23個の質問項目に5段階評価で回答するというものです。このアンケートを受講前と受講後に実施し、習熟度を評価しました。この結果は図4のようになり、習熟度が上昇している項目と低下している項目が存在する非常に興味深い結果が確認されました。これは、理解していると思われていた内容が、実習を受講することで真にはわかっていなかったと気づかされたのではない

だろうかと考えられます。つまり、「無知の知」を受講生が知ったのではないかと推測されます。このように、学生の技術力の向上を定量的に把握することは、将来的に高度なIT技術者を輩出するために必要と考えています。

今回のプログラムでは、実習用のテキスト教材、eラーニング教材、パッケージソフトウェアの開発、実習時のTAまでを本学の大学院生・学部生が中心となり実施しました。本学の学生の技術力の高さを再認識したプロジェクトでもありました。

今後は、開発したソフトウェアと教材を活用し、全道の高校生等に対して高度なIT技術を学ぶことができる機会を提供して行きたいと考えています。

自己評価平均値の推移



図4 自己評価結果



## 新さっぽろ冬まつりに参加しました

平成19年2月2日(金)～4日(日)「新さっぽろ冬まつり」(札幌市厚別区・株式会社札幌副都心開発公社 主催)が、ふれあい広場あつべつ(厚別区役所前広場)などを会場に実施され、今年も本学は上原ゼミの作品で参加しました。

今年は雪不足のため開催が危ぶまれましたが、雪を搬入して何とか実施にこぎ着けました。昨年好評だった「おやすみ雪だるま」の雪の滑り台(横たわった格好の頭でっかちの雪だるまの傾斜を利用して雪の滑り台が作られている)は今年はスケールアップして、昨年に比べてより大きくなり、またイグルーも健在で、スノーキャンドルにてらされて雰囲気が盛り上がります。

今年はこの会場のどこからでも見える場所に縦3m×横4mの雪のスクリーンが設置されました。本学の作品の他、会場の様子などがリアルタイムで上映されるなど、意欲的な取組みにも使われていました。今年提供した本学の作品は、これまで

の受賞作を中心に9本をつなげてひとまとめにしたものです。NHKのふるさとCM大賞で受賞した

「4000kmの旅～渡り鳥の休息～」や「紅葉とエゾリス～浦臼神社の森～」、また星の降る里芦別映画学校 ふるさとビデオ大賞で星の降る里芦別賞を受賞した「森のふくろう」など、力作揃いです。来場者も足を止め、中には雪の上に座り込んで作品に見入っている人もいました。

会場では飲食コーナーもあり、多くの人が暖かな食べ物に舌鼓を打っていました。そのほかに、餅まきやアイスキャンドル作成体験、スタンプラリーなど、参加できるイベントも数多くあり、子供達に人気があったようです。今年はお天気にも恵まれて多くの来場者があり、にぎわいのあるイベントとなりました。(総務課)



## Ebetsu Snow Festival 2007

### 「江別の冬を楽しもう」に参加しました

情報メディア学部 教授 松井 伸也

2月10日(土)午後13:00から江別国際センターとその駐車場を使い「江別の冬を楽しもう！」が開かれました。主催は江別市国際交流委員会で、江別市内の様々なNPOがボランティアとして参加し、本学からはCOC・よさこいサークル・ボランティアサークルの学生達が参加しました。ここ数年彼らは雪像と滑り台作りを中心に参加しています。今年は雪こそ降りませんでした。外での参加では寒い思いをしました。その中でCOCは「雪うさぎ」の雪像と「雪に描くお友達」、「かまくら」などを、よさこいサークルとボランティアサークルは「ぞうさん滑り台」と「うさちゃん滑り台」を前日の午前から当日のお昼までの時間をかけ作成しました。なお「雪うさぎ」は江別の「マシュマロンピック」の雪像コンテストにエントリーしましたが、惜しくも入選はのがした模様です。また滑り台は子供が怪我をしないように細心の注意を払い作成していました。

当日はボランティアの50人を含め200人以上の参加者がありました。焼き芋・おでん・お汁粉・

雑煮などが無料で振る舞われ、本学の学生も堪能していました。また学生さん達は滑り台で子供のサポートを行い、雪上ゲームにも参加、表で「よさこい」の演舞、センター内に作品展示など料理以外では多彩な活躍を見せていました。今回は本学だけが大学としての参加で、評判は上々でした。一言付け加えると、江別のNPOさん達がボランティアで作った料理を堪能する姿も評判が良かったようです。

私は今回が初めての参加でしたが、学生達は今まで多くの国際センターでの行事に参加しており手慣れたものでした。私の目には頼りがいのある学生達に写りました。これは他のボランティアの方々から寄せられた感想でもあります。

最後に、今後も彼らの多くが行事に参加し、地元の方々に頼られる経験を深めてくれることを願い報告とします。





## 学生相談室の講演会

### ～軽度発達障害とうつ状態を理解するために～

学生相談室長 穴田 有一

2月25日、学生相談室主催の第2回講演会が本学115教室で開催されました。

本学に学生相談室が開設されてから4年になります。開設当初から3年間は教職員の相談員が学生のさまざまな悩み事の相談に応じていましたが、今年度からはお二人の臨床心理士の先生に来ていただき、これまでよりも専門的な立場からカウンセリングにあたっています。しかし、悩みを抱えた学生への対応は臨床心理士の先生や学生相談員だけに任せておけばいいものではありません。クラス担任やゼミナール担当教員、さらに個々の授業を担当する教員、あるいは学生サポートセンターなどの職員と適宜連携をとりながら進めていくことが大事です。そのためには、教職員が学生の悩みの原因をできるだけ理解することも必要です。そのような学生の悩みを学ぶ場として、昨年度から学生相談室主催の講演会を行っています。

今回の講演会は、講師として北海道医療大学心理科学部の近藤清美教授をお招きし、「心の問題をかかえた学生への対応」と題して行われました。講演では、軽度発達障害とうつ病などの神経圏の心の問題という二つの大きな題材を取り上げていただきました。内容の濃い少し欲張った題材ですが、ここ数年、大学の入試形態が多様化したためにこのような問題を抱えた学生も少なからず入学するようになり、そのような学生に対する教職員の理解が急がれているのです。

近藤先生の講演は決して滑らかな弁舌とはいえませんが、とつとつとも言える独特の話し方は、知らず知らずのうちに、私たち聴衆を近藤先生の世界に引き込んでいきました。軽度発達障害とは知的遅れを伴わない脳の一部の機能障害であり適切な支援を必要とする

こと、抑うつ状態は一時的な心の問題であり、早期発見と適切な薬物療法が重要であることを分かりやすく説明してくださいました。パニック症や摂食障害、身体表現性障害など一時的な心の問題には様々なものがあることも理解できました。また、軽度発達障害は知的遅れを伴わないどころか、特定の能力について人並なみずれた才能を発揮する場合もあり、天才物理学者のアインシュタインや映画俳優のトム・クルーズも軽度発達障害であることがわかりました。

本学では今年度、在籍学生の約半数にあたる50人弱の学生が学生相談室を訪れました。そしてその約半数に、うつ状態や軽度発達障害の可能性が認められました。このような現状を考えると、今回の講演もとても参考になる有意義なものでした。近藤先生には、この場を借りて改めてお礼を申し上げます。また、今年度は10月にフォーラムを開催し、本学学生相談室のお二人の臨床心理士の先生に相談学生の事例紹介をしていただきましたが、来年度もこのような啓発講演会を行い、学生の心の問題に対して、さらに教職員の理解を深め意識を高めていきたいと思っております。





## 平成18年度 公開講座終了報告

今年で3年目を迎えた平成18年度本学公開講座がすべて終了しました。平成16年度に初めて公開

講座を実施して以来、内容・回数共に充実してきました。本年度の実施内容は次の通りです。

講座名	日程	場所	参加人数
投資って、何？ -ポートフォリオ・マネージャーの実践的投資論- (全8回)	平成18年5月9日(火)～6月27日(火)の毎週火曜日	札幌サテライト	82
体験！デジタルビデオ編集 (全8回)	5月27日・6月17～29日(土)	本学メディア実習室	7
デジタルカメラで写真を楽しむ -撮影と加工-①(全2回)	6月3日(土)、4日(日)	本学メディア実習室	21
文化から見た日本と世界(1)	6月24日(土)	札幌サテライト	27
文化から見た日本と世界(2)	7月1日(土)	札幌サテライト	25
コンピュータで暑中見舞いを作ろう(全2回)	7月29日(土)、30日(日)	札幌サテライト	16
ゆっくりのんびりWordに挑戦 (全5回)	8月21日(月)～25日(金)	本学実習室	19
東京フォーラム：景気サイクル・資源・知財-三つのキーワードで探る、日本経済と金融資本市場の展望-	9月15日(金)	東京サテライト	48
プログラミング入門-Java- (全4回)	10月11日(水)、14日(土)、18日(水)、21日(土)	本学実習室	20
国際理解シリーズ：時空の旅人 第1回 -タウン&ガウン-	11月2日(木)	本学 213教室	11
食と健康 -油断大敵！ 内臓肥満-	11月14日(火)	札幌サテライト	27
デジタルカメラで写真を楽しむ -撮影と加工-②(全2回)	11月18日(土)、19日(日)	本学メディア実習室	26
特別講演会「会計基準の国際的統合化と日本企業への影響-米国会計基準と国際財務報告基準との更なる統合化の進展-」	11月21日(火)	本学松尾記念館講堂	59
コンピュータで年賀状を作ろう① (全2回)	12月9日(土)、10日(日)	札幌サテライト	14
コンピュータで年賀状を作ろう② (全2回)	12月16日(土)、17日(日)	札幌サテライト	14
国際理解シリーズ：時空の旅人 第2回 -ケンブリッジでお茶を-	平成19年1月9日(火)	札幌サテライト	22
テーラーメイド医療の現況と将来	1月30日(火)	札幌サテライト	16
数学屋の見た天気	3月10日(土)	札幌サテライト	27



参加者の中には、本年度だけで7～8回参加されたリピーターの方もいらっしゃいます。また、一度参加された方の中には、次には友人を誘ってくださったり、ご夫婦で参加してくださったりした方もいて、確実に受講者の輪が広がっているのを感じます。

本年度は、地域の皆さんがよりコンピュータに親しむ機会を提供しつつ、国際交流に視点を据えた講座の立ち上げや、東京でのフォーラムの実施など、これまでにない新たな方向性を打ち出した

年でもありました。

また、これまでの講座は一般教養的なものやコンピュータの入門や初級講座が中心でしたが、次年度はそれ以外にもコンピュータの中級を目指すものやより専門性の高い講座の実施なども計画しています。回数も増やし、受講料については地域貢献の趣旨に鑑み、次年度も全て無料で実施の予定です。より多くの市民の皆様の期待に応える講座を、今後も提供していきたいと思えます。

(総務課)



「時空の旅人」の様子

「コンピュータで年賀状をつくらう」の様子





## 特別講演会

### 「会計基準の国際的統合化と日本企業への影響」開催

平成18年11月21日(火)北海道情報大学 特別講演会「会計基準の国際的統合化と日本企業への影響ー米国会計基準と国際財務報告基準との更なる統合化の進展ー」が本学松尾記念館講堂で開催されました。講師は、昨年に引き続き、国際会計基準審議会理事の山田辰己先生にお願いすることができました。

国際会計基準審議会(本部イギリス・ロンドン)は、各国の会計基準の標準化を目指して活動している組織で、理事はわずか14名です。企業が世界的なスケールで活動している今日、国によって会計基準に違いのあることは大きな弊害です。この審議会は会計基準を統合化するために世界の最前線で活動している組織で、今回講演をお願いした山田先生はアジア人として唯一の理事で、ロンドンを拠点に日本をはじめとするアジアを中心に飛び回っています。その先生の講演が今年も実現しました。

講演は、専門的ながらも学生にも理解できるように、かみ砕いた内容で、そもそも「国際会計基準とは何か」から始まり、進展著しいアメリカ

の会計基準の統合化の現状、動き出した中国の動向や、日本の現状についてなど、情報の量・質共にボリュームある内容でした。また、英語でコミュニケーションを取ることの重要性についても触れ、学生にも大きな刺激となったようです。

講演会は、一般市民だけではなく、他大学の研究者や院生・学部生などの参加もあり、貴重な機会を提供できたという面においても特徴的な講演会となりました。また本学学生とのディスカッションも行われ、参加者には貴重な経験となりました。(総務課)



## 同窓生のページ



経営情報学部情報学科 平成16年度卒 林 勇治郎

CATVの仕事始めて2年。昨年9月から番組制作に携わるようになった。県域放送やキー局の制作現場と違うのは、地域に一番密着したメディアだということ。

市町村議会の定例会からおばあちゃんが100歳を迎えたというほのぼのネタまで取材エリアは狭いが番組内容は濃い。

この仕事は一番やりたかったこと。夢が叶った。だが、それはその業界の中に入れて「いただいている」だけであり、仕事ができるかは別。夢が叶うまでは「あれもやりたい」「これもやりたい」と「希望」ばかり考えていた。中に入るとそれだけでは相手にされない。どう「現実」にするか、具体的な方法を示して初めて相手にされる。職場で様々なアイデアを出す、それは自分に課題を課すため。自分なりの考えを示す、方法を考え提示する、「発言に責任を持つ」とはそういうことだと思うから。

さて、学生時代に学んだことは仕事で役に立つ

の?と疑問を持つ学生がいる。仕事柄かもしれないが、大学の授業で「聞いたことがある」言葉がよく仕事で出てくる。それは聞いたことがあるだけで、説明はできない。勉強不足。学生時代を振り返り考えることは、授業は真剣に聴くべきだったということ。全ての時間を学ぶことに費やせるときは学生時代しかない。しかも、高い授業料を払い(親に払ってもらって?)学んでいるのだから元を取る気持ちで勉強しても損はない。だれでも言うことだが、社会人は日々勉強。スキルアップのための資格取得や仕事の習得。仕事とは学び続けること。だから、学生時代にできる勉強は学生時代にしておきたい。私は仕事を初めて小学生から勉強をやり直しているようなもの。漢字、計算、一般常識など。

最後に、履歴書に「北海道情報大学 卒業」と書くとパソコンができる人と期待される。だから、情報産業に就職しなくても、OSの基本操作、文章作成、表計算、簡単なネットワーク設定は「できる」ようになろう。情報大卒業生の「読み書きそろばん」として。



## 研究テーマ紹介 ～ 観光もITの時代へ ～

経営情報学部医療情報学科 講師 長尾 光悦

北海道の主要産業は1兆円産業である農業と思われている方も多いと思いますが、その農業の経済効果を上回る産業が北海道にはあります。それは「観光産業」です。観光産業は、現在、消費額で1兆2000億円、波及効果も含めると1兆9000億円規模と試算され、北海道のGDPの約1割に達しようとしています。

北海道の観光資源は、元来、世界的に見ても魅力が高いものでしたが、ここ数年、旭山動物園の人気、知床の世界遺産への登録などで国内からの観光客増加、更には、海外においても観光地としての認識が高まり、外国人観光客も急増しています。これは、ニセコに大量のオーストラリア人観光客が押し寄せ、多くのリゾートマンションなどが建設されたことで地価高騰が起こったこと、また、新千歳空港周辺のゴルフ場では韓国や中国からの観光客で溢れかかっていることから明らかです。

このように北海道の主要産業となっている観光をさらに促進するために様々な観光振興策や観光戦略が検討されていますが、的確で効果的な観光振興策や戦略を立案するために必要なものがあります。それは、観光客がどのような観光をしているのかを把握することです。

以前から観光客がどのような観光をしているのか、つまり、観光動態調査は行われてきましたが、これまでは鉄道や航空機における観光客の流入量や宿泊施設の客室稼働率といった情報の調査分析が主でした。日本では団体旅行が主流だったため、そのような情報からだけでも、観光客がどのような観光をしているのかを把握できましたが、近年、団体旅行の数は激減し、これに代わり個人で観光地を巡る周遊観光が急増しています。また、これに付随し、レンタカーを利用して周遊観光を行う旅行者が増加傾向にあり、北海道の夏季においては、約6割の旅行者がレンタカーを利用して周遊観光を行っていると報告されています。このように、現在、個人での周遊観光が急増しているため、これまでのような統計情報だけからでは、北海道でどのような観光が行われているのかを把握する

ことが困難になっているのです。

私は、研究テーマの一つとして、北海道でレンタカーを利用して周遊観光する観光客の動態をIT技術を利用して簡単にそして正確に調査分析する方法を研究しています。この研究では、GPSを使って観光客の位置データを長時間、連続的に収集します。GPSは、携帯電話、PDA、カーナビなどにも備わっている位置測位のための装置です。この研究では、図1にあるGPSを使っています。このGPSによって記録された位置情報から観光客の滞在や移動に関する情報を計算します。カーナビでも目的地までの距離や時間が計算できるので簡単に計算できるように思えますが、ここでは、観光客がどの施設にどのくらい滞在したのかまでの情報を、Yahoo MapsとGoogleローカルというサービスをマッシュアップすることで計算しています。すると図2のように観光客がどのようなルートを通ってどこで観光をしたかを表す情報が得られます。

このようにGPSの位置情報から各観光客の動態情報を獲得できます。この動態情報を多数集めることによって観光振興策や戦略を検討することもできますが、この研究ではIT技術を利用することで、更に効果的な情報の提供可能にしています。それは、北海道の各市町村の観光地としての魅力度を計算するというものです。



図1 研究で利用しているGPS







お知らせするサービスも実現できます。

観光産業は、国土交通省による観光立国推進基本法やビジットジャパンキャンペーンからもわかるように、北海道だけではなく日本全体で期待を集める分野です。このような観光に関する研究への期待は益々大きなものとなっていくことは間違いありません。その証拠に情報処理学会第68回全国大会において本研究が大会優秀賞を頂きました。ちょっとした自慢です(笑)。

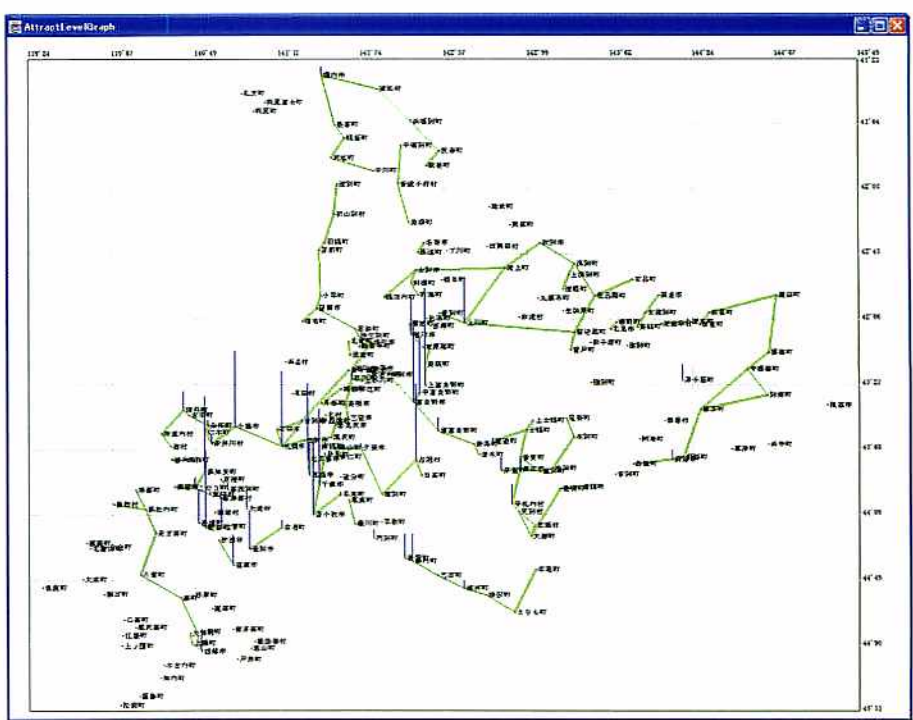


図3 各都市の観光魅力度と主要都市間移動

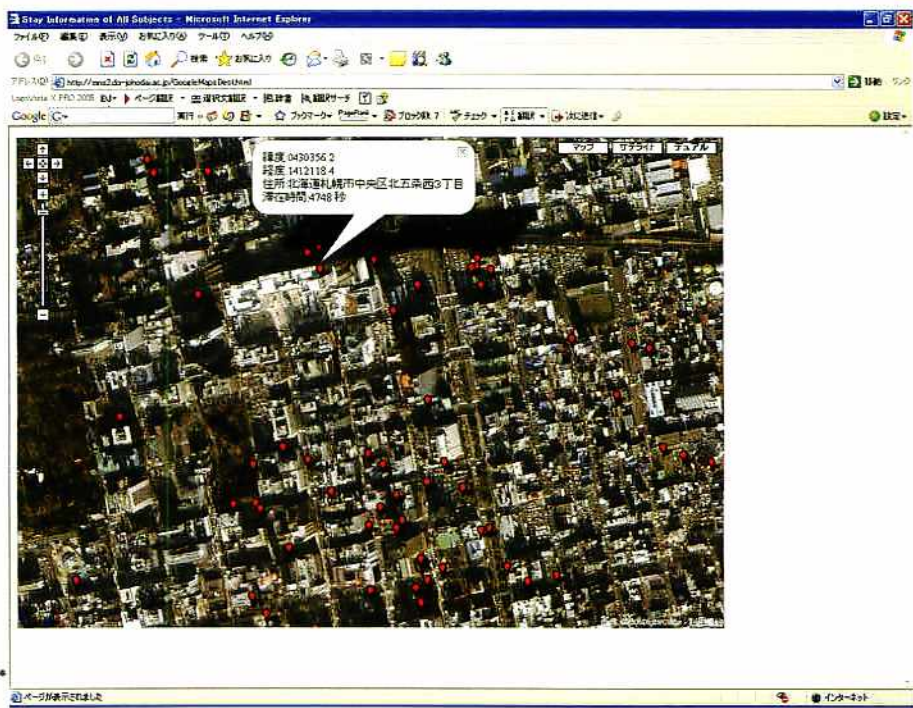


図4 潜在情報の地図上での表示



# 情報処理学会での研究発表

経営情報学部 システム情報学科 居内 寛貴

大学4年間の思い出のなかで特に印象的なのは、中島先生や先輩・後輩と一緒に取り組んだ研究を発表させて頂いた事です。2006年10月に情報処理北海道シンポジウム2006にて発表をいたしました。私は学会に参加させて頂くのも初めてだったので、2日間の日程を緊張しながらも新鮮な気持ちで過ごしていました。発表自体は主に私が先生のアドバイスを頂きながら進めた成果について報告致しましたが、細かい内容や発表時の表現方法について皆で何度も議論し、発表前夜は深夜まで壁に貼ったポスターに向かい個々の意見をぶつけ合っていたのを覚えています。結果については、皆さんからのご協力もあり「技術奨励賞」を頂きました。

研究を行ってきた2年間を振り返り、昨年の4月から大学院の特別科目等履修生として勉強させ

ていただいていることもあり、大学院生室に連日泊り込んだことを思い出します。今回の経験を生かし、引き続き来年度に大学院へ進学した際もがんばっていききたいと思います。



## 情報処理学会 第69回全国大会に参加して

林 雄二

平成19年3月6日(火)～8日(木)の3日間、早稲田大学大久保キャンパスにおいて、情報処理学会の第69回全国大会が開催されました。なお昨年第68回全国大会では、本学の長尾先生が大会優秀賞を受賞されています。今回の大会に、本学からは学部生2名・大学院生5名・教員1名が、論文発表およびデモセッションで作品デモを実施しました。発表題目および発表者は次のとおりです。

### 【学部生】

- ・「Gigabit Ethernet全二重ワイヤレートに対応したネットワークフォレンジックシステムの開発」居内 寛貴
- ・デモセッション「ホモロジー解析のためのアミノ酸配列視覚化手法の提案」齋藤 大輔

### 【大学院生】

- ・「形式的仕様記述に基づくテストケースの作成」亀田 佑二
- ・「高校生を対象としたシステム基盤構築を通じた実践的IT教育の試み」一田 陽平
- ・「汎用性の高いSCORMコンテンツオーサリングツールの開発」山本 穰
- ・「eラーニングにおける適応的な教授法に基づく学習支援システムの提案」小笠原有正
- ・「セマンティックWebに基づく適応的な教材検索とリコメンデーション機能」中村 佳祐

### 【教員】

- ・「Webデザインコンテスト運営支援システムの開発」齋藤 一
- それぞれの発表とも、参加者と活発な質疑応答がなされ、注目を浴びていました。



## 第12回 北海道映像コンクール学生部門賞受賞 熱さとの戦い江別やきもの市

情報メディア学部3年 上原ゼミ 渋谷 哲郎

昨年、私たちは「江別・焼き物市」という作品で賞を受賞する事ができました。

これは主に、プロを対象とした映像コンクールで、デイリーニュース部門、企画ニュース部門、長編部門、奨励部門、学生部門に分かれています。応募された作品は、今でも第一線活躍しているプロの厳しい目で審査されます。

札幌のスピカで受賞式が行われ、受賞式では受賞者と審査員たちとの懇談会が行われ映像に対する熱い意見が交わされました。

この映像作品は、ゼミ生三、四年生合わせ二十人以上の生徒とカメラで撮影しました。

これは上原ゼミ始まって以来のことです。ですからどのように撮影すれば迫力が伝わるのか、カメラをどこに設置するかなど、何度も企画会議が開かれました。本番は一度きりなので練習も出来ず、

不安だけが募っていききました。撮影当日、朝は曇っていたものの昼ぐらいから快晴へと変わり眩しい位の日



差しが照る絶好の撮影日和となりました。しかしこの日差しによりどんどんと気温は上がり、ゼミ生達の体力を奪っていききました。

しかし、みんなのいい映像を撮りたいという気持ちが通じ、素晴らしい物を撮ることが出来ました。残る仕事の編集も戸澤君が夏休みを返上して仕事を進めてくれたおかげで無事仕上げる事ができました。こうして、ゼミ生全員の力を合わせる事により賞を貰うことの出来るような作品を作る事が出来たのです。

第12回北海道映像コンクール  
表彰式





# 中国短期研修報告

情報メディア学科2年 伊藤 大二

僕が中国に興味を持ち始めたのは高校3年生の時でした。その時の理由はただなんとなくで、少しずつ独学で簡単な中国語を覚えていく程度のものでした。この時の僕はまさか自分が中国へ短期留学をするとは思っていませんでした。大学生になり、1年生は中国語、ロシア語、ドイツ語の3科目の中から1科目、第2外国語として履修できると知ったとき、僕は迷わず中国語を選びました。1年間中国語を勉強しながら、玉置先生の中国の話の話を聞いていくうちに、ただ中国語を勉強しているだけではなく、直接中国へ行き、自分の中国語の成果を試したり、現地の人と触れ合ったり、中国文化を学びたい、という思いが強くなっていきました。そして、2年生の春に僕は中国短期留学に参加することを決めました。

きっかけは「これからの中国はすごいよ。今の中国の勢いはとてもあって、アジア経済の中心になるかもしれない。」という言葉でした。中国へ行くまでの3ヶ月間は玉置先生に特別に中国語講座を開いてもらい、少しでも現地へ行く前に勉強しておこうと、週に1回、中国語の勉強をしていました。そして、海外事情1日目になり、中国行きの飛行機に乗ったとき、機内の新聞や雑誌は既に中国語。夢じゃないんだな、と思いました。中国に到着して空港を出た瞬間に、突然の蒸し暑さと中国人の大きな声での会話のおかげで、とうとう私は中国に来たんだと、すぐに実感させられました。初めての海外ということもあり、今頃になって忘れ物はないか、自分の中国語は通じるかどうかなど、とても不安で一杯でした。何より、今

の日本と中国の仲はいいとは言えないこともあり、自分は1ヶ月も無事に海外生活を送れるのかとても心配でした。しかし、空港に迎えに来てくれた南京大学の2人の先生は、僕らの片言の中国語を一生懸命理解しようとしてくれ、わかった時に笑顔で返事してくれ、私の中の中国人の悪い印象は一気に吹き飛びました。中国に滞在して3日目に、私は2週間中国語の勉強をするために南京大学へ行きました。南京にいる間は、午前中の中国語の授業で、先生の説明を全て聞くように努力して、午後になると授業の成果を試すためにみんなでどこか出かけたり、中国語で会話したりと楽しい日々でした。そのおかげで南京に住んでいる人たちと友達になることも出来ました。韓国人やドイツ人、スペイン人の留学生もいて、いろんな国から中国に留学している人がいました。しかしこの国では共通語は中国語。当然それらの国の言葉は知らないで、つたない英語と中国語でなんとか会話を成り立たせるのに必死でした。その甲斐もあって、一緒に酒を飲む機会も生まれたり、自分の国で流行っていることの話や、一緒にカラオケに行ったりと、中国語で会話をして中国人以外の国の人と仲良くなれたことにはとても感動しました。

しかし、やはり自分の中国語はまだ滑らかに話すことができなく、身振りや筆談で話さないとわからない時もあり、自分の中国語はまだまだ足りない、思い知らされたりもしました。少ししかまともに会話することができないまま南京を去ってしまい、もっと中国語を勉強しておけばもっと意思疎通ができた、今では少し後悔しています。いつかまた南京へ行って、今度はもっとちゃんと中国語を話せるように、日本に帰ってきた後も中国語の勉強をしていきたいと思います。今回の海外事情で学んだことは、語学は一生勉強しても足りないこと。語学を勉強することで友達の輪を広げることができるという事。たった1ヶ月の短期留学でしたが、とても有意義な海外生活を送ることができました。中国で仲良くなった人たちにまた会える時まで、中国語の勉強を続けたいと思います。



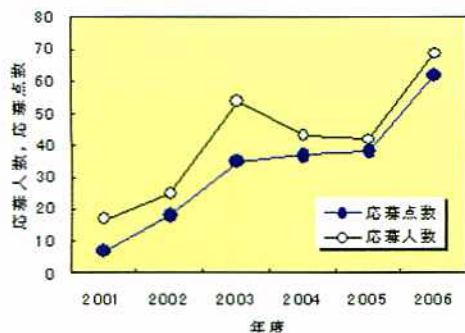
左端が筆者



## 2006年度 第6回Webデザインコンテストの結果

2001年度に始めたWebデザインコンテストは、今年度で第6回目を迎えました。第1回の応募作品数は7点でしたが、グラフのように回を重ねるごとに増加しています。今年度は通信教育課程からの応募も含めて65点の作品が集まりました。また、参加学生数も年々増加しており、本コンテストの目的の一つである本学学生の活性化に寄与しているのではないかと思います。

さて、今年度の受賞作品は以下のようになっています。応募状況について簡単にまとめますと、テーマ部門への応募が少なくフリー部門、ビギナー部門への応募が大多数を占めました。テーマ部門への応募が少なかったのは、テーマが『仕事』という扱いにくいものだったためかもしれません。また、今回から新設したデジタルポスター部門への応募数が3点と少なかったのも反省材料です。来年度は学生への広報活動を工夫するなどしてこの部門を盛り上げたいと思います。



通信教育を含む全学生の応募状況

なお、昨年11月22日昼休みに本学校舎棟1号館2階の学生プラザで授賞式を行いました。授賞式は3年前から学生プラザで行っていますが、昼休みの掲示板前ということもあり、通りがかりの学生や教

職員が見守る中、学長から受賞楯、副賞賞金などの授与が行われました。今年も受賞者の晴れやかな笑顔を見ることができました。今回参加しなかった学生の皆さんも次回はぜひ積極的に参加して、入賞を目指してください。

### 第6回Webデザインコンテスト 審査結果

#### ◎最優秀賞(副賞5万円)

(テーマ部門、フリー部門から選ばれます)

- ・「俺のT-shirts」 小田昌

#### ◎テーマ部門優秀賞(副賞3万円)

- ・該当作品なし

#### ◎フリー部門優秀賞(副賞3万円)

- ・「How to Photoshop」 稲葉明(通信教育)

#### ◎ビギナー部門優秀賞(副賞1万円)

- ・「CHESS ROOM」 井上稔(通信教育)

#### ◎テーマ部門、フリー部門から選ばれる各賞(副賞1万円)

##### ○努力賞

- ・「身近な仕事と環境」 佐藤広幸(通信教育)(テーマ部門)

##### ○芸術賞

- ・「Fragments」 芦原建(フリー部門)

##### ○技術賞

- ・「色彩工房」 金子拓磨(フリー部門)

##### ○アイデア賞

- ・「スピード暗算」 森若菜(フリー部門)

##### ○イラスト賞

- ・「七番地のVigilants」 染谷剛司(フリー部門)

##### ○努力賞

- ・「The Draw」 細野夏輝(フリー部門)
- ・「Click? Clack!」 松永克哉(通信教育)(フリー部門)
- ・「。○ ほわ ほわ ○。」 坂本なつき(フリー部門)

##### ○アイデア賞

- ・「1 or 0」 小野智子(通信教育)(ポスター部門)

#### ◎特別賞(副賞図書カード3千円)

##### ○レベルアップ賞

- ・「遊べるホームページを目指したページです」 佐藤博紀(フリー部門)

#### ◎ビギナー部門努力賞(図書カード3千円)

- ・「まばたき」 佐藤祐加
- ・「初心者のためのROBOLAB」 佐坂昌彦、小川智隆
- ・「ソフビの素体くん改造」 渡部祥  
(Webデザインコンテスト実行グループ)





# ビジネスプレゼンテーションコンテスト

第3回を迎えたビジネスプレゼンテーションコンテストは昨年11月末に締切られ、12月20日と21日に書類審査を通過した各部門上位



5名(組)の学生による公开发表会がおこなわれました。今回は学生諸君の頑張り先生方の協力もあり応募点数はビジネスプラン部門6件、ビジネスアイデア部門28件と多くの応募がありました。20日のビジネスアイデア部門、21日のビジネスプラン部門の発表会には夕方遅い時間にもかかわらず「どのようなことをやるのか知りたい」という一般学生の積極的な参加もありました。そのような中で発表者の熱演(?)や、審査にあたった経営ネットワーク学科の先生方も評価に戸惑うプレゼンテーションもあったり楽しい発表会となりました。成績は以下のとおりで、本年1月19日に学長室で表彰式をおこないました。

## ◎ビジネスプラン部門

- ・最優秀賞「携帯端末向けWebクーポンサイト事業」



システム情報学科3年 森川貴康、藤谷洋士

- ・優秀賞「ビルの屋上での永田農法」

経営ネットワーク学科4年 宮崎渉

- ・奨励賞「死ぬまで働けプロジェクト」

経営ネットワーク学科3年 千葉祐明

## ◎ビジネスアイデア部門

- ・アイデア賞「住林エコファンド」

経営ネットワーク学科3年 住吉隼輔、林悠平

- ・アイデア奨励賞「NSHファンド」

経営ネットワーク学科3年 芳賀誠司、提谷誠一郎、中村友則

- ・アイデア奨励賞「知的財産企業への投資」

経営ネットワーク学科3年 竹元祥、荻野正子、張鎧麒

当日は北海道新聞社江別支局長も取材に訪れ、

12月23日の北海道新聞江別版に発表会の模様と最優秀賞の森川君と藤谷君のプレゼンテーションの写真が大々的に取り上げられ、本学



の活動の一端を紹介するのに大いに役立ったと思います。

今回はビジネスアイデア部門に多くの応募がありました。今ひとつ審査員をうならせるアイデアに乏しかった感があります。ビジネスプランやアイデアは常日頃問題意識を持っていなければ、考えようとしてもなかなか思いつきません。また、プレゼンテーションも今やどこの会社でも必須のものとなっています。したがって学生時代にこのような機会を利用して経験を積み重ねてください。今年も実施の予定ですので事業化に結びつくようなプランやアイデアを期待しています。



# 学生実行委員会の活動紹介

学生実行委員会 委員長 三上 真平

私達実行委員会は、新3年生17名。新2年生19名。計36名で構成されています。

基本的には、6月下旬にある体育祭と10月初旬にある大学祭の管理・運営をするのが私達の仕事です。簡単に言えば高校時代の生徒会のようなものですが、それほど堅苦しい訳でもなく、時に楽しく、時に厳しく、TPOを考えつつ各行事を運営するのが私達です。

体育祭では、パンフレットの作成や、競技種目の決定、運営、管理。当日までの呼びかけや、当日放送。当日最後の楽しみである交流会という食事会のようなものの管理運営などを行っています。

また、「蒼天祭」という名の大学祭を管理・運営をします。パンフレットの作成や模擬店の参加を呼びかけたり、フォトコンテストの写真を募集したり。当日ステージで催される企画を考えたり、企業へ協賛の協力をお願いをしたりなど、普通の学生生活では味わえない経験も多々経験できる場に

なっています。また、芸能人を呼ぶ「蒼天ライブ」では、去年はYUIが来ているなど、頑張っています。

それ相応の苦労や辛さ。時間が無くなったり、疲れたりもしますが、完成した時の充実感や達成感を味わえる場所だと思います。

活動場所は二階売店のもっと奥の実行委員会室。体育館の上です。

活動時間は主に昼休み・放課後です。

興味がある学生は一度見学などをしに来てください。歓迎します。



体育祭で



実行委員会メンバー



経営情報学部でゼミを始めてから10年以上が経過した。Webサイトの構築には早くから取り組んできたけれど、今では多くのゼミが取り組んでおり、ゼミの特色とは言えなくなった。プログラミング言語もさまざまなものを扱ってきた。これら(Webと複数のプログラミング言語)とCGを組み合わせたテーマは、卒業研究として面白かったけれど、ゼミを決める前の学生さんには、その面白さを理解してもらうことは難しそう。音声も扱ってきた。最近は音楽をやりたいという要望こそあるものの、芸術の領域には踏み込めない。純粋に「音」を処理する技術や、人間の「声」に興味を持つ人はあまりいないようだ。学生にゼミに興味を持ってもらうことが難しくなってきたのが最近の悩みだ。

これまで、卒業研究では学生一人一人別のテーマに取り組むことが多かったが、今年度は全員ゲームを作りたいと一致した。ここ数年、ゼミの全体テーマとして「インタラクティブティ」を取り上げているからだろう。これは、何を作るにせよ、

コンピュータとの相互作用が大切だよということなのだが、一番わかりやすいのがゲームということで、意見が一致したようである。卒業研究としてゲームを取り上げるのはゼミとしては初めてだったが、本とにらめっこするより、プログラミング言語のドキュメントと格闘しながら作るという泥臭い作り方が成立するあたりが、良くも悪くもわがゼミの特徴を表しているのかもしれない。

ゼミの取り組みの根底には、「ユーザの立場」を重視するという考え方がある。使う人に役に立つもの(多くがプログラムかWebサイト)をつくる時、使う人の立場でそれを提供する側が苦勞していろいろ工夫しなければいけない。ゼミの学生には、自分が作るという作業も楽しいが、できたものが人の役に立てばもっと楽しいと考えてくれるように願っている。



担任 広奥 暢

4年 鈴木 孝史

## ゼミ

### 紹介

## 広奥ゼミ

## 中村(忠)ゼミ

水曜日に始まる楽しい中村ゼミの時間。教授の声と学生の笑い声、そして静けさがうまい具合に交わりあう。楽しい事は辛いことがあってこそ実感できるもので、これは辛い中にも温かい心の中村教授でしか味わえなかったと実感している。中村ゼミでは就職活動、そして社会人になった時に必ず必要になるコミュニケーション能力、個々が持っている個性を発見し、それを最大限に引き出してくれるゼミである。是非想像して頂きたい。その教授の下でゼミを通じ、学べたらどうだろうか。就職活動そして、その先の社会人生活が充実するのではなからうか。

ゼミの内容をここに書いてしまうと中村ゼミに入ったときの楽しみが半減してしまうと思うので書こうとは思わない。自分も含め学生は楽しいことを追及しすぎて辛いことに立ち向かおうとしない。なので逆に辛いことを具体的に3つ書き述べようと思う。

1. 生きるうえで当たり前である時間を守らなければならない。

2. 期限に間に合わないのであれば事前に連絡をする。

3. ゼミを欠席する時は必ず名前を入れてメールまたは電話をしなければならない。

ここに書いた事項を守れる学生諸君は実に楽しくゼミ生活を終えることが出来るであろう。守れないと感じている学生諸君は入ってから変わればよい話なのだ。自分も元々はこれらの事を守れるような学生ではなかった。しかし、中村教授にみっちり教育していただいたおかげで卒業と同時にゼミも終えることができたと思う。辛いことをたくさん書いてしまったが、ゼミ生活を終えると全てがよい思い出であり、充実した2年間であった。

この中村ゼミの紹介文に目を通して頂き、たいへんありがたく思う。ここまで読んでいただけた方々、きっと中村ゼミに入るであろう。中村ゼミで学んだ事によって、個々の個性をさらに発揮でき、就職活動やその先の人生で役に立つ。それを信じ、中村ゼミで大いに楽しんでください。

松尾三郎記念像の前でみんなで“チュウ”





# 学生サポートセンターより

## 平成18年度卒業生の就職活動を振り返って

日本経済は回復の兆しが見え、大学卒業生に対する求人数は増加傾向にあります。北海道における就職環境も金融業、流通業を中心に明るい兆しはありますが、公共事業費削減等の影響を受け全国的な景気回復の流れから遅れている状況が続いていると認識しておいた方が良いでしょう。実際、北海道労働局が発表した1月の有効求人倍率は0.53倍で3カ月連続前年同月を下回っております。また、平成18年度に本学に来た求人社数は約1,900社ですが、北海道の企業の求人社数は約280社と決して多いとはいえません。そのような状況下において、平成18年度も97.2%と道内でもトップクラスの非常に高い内定率を得ることができたのは、学生の皆さんが努力した賜であると評価しています。特にIT業界を目指す学生の皆さんが、勤務地にこだわらず道外へも目を向け積極的に活動を行った結果と言えるでしょう。

就職試験が最盛期を迎えた4年生の皆さんは、企業が採用数を増やし報道等では売り手市場と言われていますが、バブル期に採用の痛手を経験している企業は、採用基準を下げることは少なく厳しい就職活動が続くと思います。昨今、企業における求人数とはあくまでも予定であって、最終的に求人数に達しなくても構わないという考えです。企業は自社にとって必要な人材のみ採用するという姿勢ですので、今一度気持ちを引き締めて臨んでもらいたいと思います。実際近年の採用においては、企業独自で作成するエントリーシートやグループディスカッション、プレゼンテーション面接等の試験を行うことにより、ハードルを高く設定し、自社の企業風土に合い、かつ自社の基準を満たす人材のみを採用しようとしています。また、特に学生が気をつけなければならないのは、昨今インターネットによる就職活動がすっかり定着しており、エントリーや説明会の予約等が簡単にできますが、最終的には自分の足を使って企業説明会、企業訪問等を行わなければ内定は得ることはできないということです。この利益社会の中で、自分の足で稼ぎ、自分自身が企業にどのようなメリットを与えることができるかを考え、それを自分の言葉でアピールできるよう努力しましょう。

3年生は近年採用活動が早期化し、3年生のうちに内定を獲得する学生が増える傾向にあります。このような状況を踏まえ、就職活動において最低限必要な知識等を習得するための支援活動としてキャリアサポートを5月から毎週行っています。年間約20回のガイダンスやSPI等の各種試験対策を行いますので、休むことなく参加してスムーズに就職活動に入れるよう準備をしておいてください。

新入生、2年生は就職活動はまだ先のことと考えず、少しでも早い時期から将来の目標を定め、その目標を達成するためにはどのような能力を身につけるべきか考え、目的意識を持って行動することが重要です。最近は就職活動においても内定を複数獲得する勝ち組と、そうではない負け組という言葉が使われていますが、勝負の分かれ目は目的を持った学生生活を送っているか否かです。現在、企業はより優秀な人材を確保し、経営体質を強化しようとしています。企業は学歴や出身大学を選考の基準とすることは少なく、個人の能力で評価しています。その能力の一つとして情報処理に関する能力はもちろん、コミュニケーション能力や論理的思考力、チャレンジ精神等学生生活や家庭生活において、時間をかけて身につける必要がある能力がほとんどであり、これらは目的意識を持って行動することにより、必然的に身につくものもあります。勉強、アルバイト、部活動、資格取得等何でも構いませんので、最低一つのことに対して目的・目標を立て努力してみましょう。

本学では、学生生活や就職等の相談窓口として学生サポートセンターがあります。特に就職に関しては、本来学生自身が学生生活の集大成として、積極的にまた自主的に取り組むことが望ましいことではありますが、学生サポートセンターでは一人一人の能力や適性にあった就職ができるよういつでもサポートを行っています。今後自分が約40年間働くかもしれない会社選びを行っているという認識のもと、悔いの無いよう積極的に活動を行うことが望まれます。何か困ったこと、分からないことがありましたら何でも構いませんので、自分で判断せずいつでも相談に来てください。また、学生サポートセンターでは卒業後でも就職等に関する助力ができるよう支援を行っていきたいと思いますので、卒業生もいつでも気軽に来校してください。



平成18年度  
就職内定率

区 分	経営ネットワーク学科	システム情報学科	情報メディア学科	全 体
在 籍 者 数	1 0 5	1 0 9	1 9 7	4 1 1
卒 業 者 数	9 4	9 3	1 7 1	3 5 8
就職希望者数	8 5	8 1	1 5 0	3 1 6
内 定 者 数	8 3	7 9	1 4 5	3 0 7
内 定 率	9 7 . 6 %	9 7 . 5 %	9 6 . 7	9 7 . 2 %



## ◆◆教職員の動向◆◆

《教員》(3月31日付)

退職 石井 詩都夫 特任教授  
羽田野 正隆 教授

《職員》(3月31日付)

退職 図書館事務室 中村 正志

## ◆◆主要行事(11月16日～3月31日)◆◆

◇法人本部◇

11月14日(火) 札幌東税務署「収益事業調査」  
17日(金) 永年勤続者表彰  
2月28日(水) 学生寮竣工修祓式  
28日(水) 理事会  
3月 7日(水)～9日(金) 監査法人トーマツ「平成18年度期末監査」  
22日(木) 理事会

◇大 学◇

11月17日 情報メディア学部教授会  
18日～19日 公開講座「デジタルカメラで写真を楽しむ」  
19日 推薦入学試験  
21日 特別講演会「会計基準の国際的統合と日本企業への影響  
—米国会計基準と国際財務報告基準の更なる統合化の発展—」  
12月 1日 功労OBの集い  
8日 経営情報学部教授会  
9日～10日 公開講座「コンピュータで年賀状を作ろう①」  
12日 ハラスメント啓発学習会  
15日 情報メディア学部教授会  
16日～17日 公開講座「コンピュータで年賀状を作ろう②」  
18日 町村信孝先生特別講演会  
22日 全学教授会  
1月 9日 公開講座 国際理解講座シリーズ(2回目)「時空の旅人」  
—ケンブリッジでお茶を—  
12日 経営情報学部教授会  
14日 特別AO入学試験(A日程)  
18日～27日 後期定期試験  
19日 情報メディア学部教授会  
26日 全学教授会  
2月 2日～3日 一般1期入学試験  
9日 経営情報学部教授会  
16日 情報メディア学部教授会  
23日 全学教授会  
27日 FD研究会  
3月 5日 経営情報学部教授会  
情報メディア学部教授会  
8日 編入学試験  
10日 公開講座「数学屋の見た天気」  
12日 一般2期入学試験  
13日 経営情報学部教授会  
情報メディア学部教授会  
16日 学位記授与式  
23日 全学教授会  
26日 特別AO入学試験(B日程)

◇大 学 院◇

11月24日(金) 研究科委員会  
12月11日(月) 研究科委員会  
1月18日(木) 研究科委員会  
2月10日(土) 大学院入学試験(2次募集)  
22日(木)～23日(金) 学位論文等公開発表会  
3月 1日(木) 研究科委員会

◇通信教育部◇

2月 2日(金) 長岡技術科学大学 見学

## ◆◆広報活動◆◆

&lt;北海道情報大学通信教育部 入学説明会:本学独自&gt;

12月:4会場(名古屋、本学、大阪、東京)

1月:1会場(福岡)

3月:2会場(東京、本学)

&lt;北海道情報大学通信教育部 合同入学説明会:私大通教主催&gt;

2月:10会場(東京(2)、仙台、名古屋(2)、大阪(2)、横浜、広島、福岡)

3月:4会場(東京、新潟、札幌(2))

&lt;進学相談会&gt;

11月:北海道 5会場(帯広、札幌、苫小牧、函館、留萌)

12月:北海道 5会場(帯広、釧路、北見、旭川、伊達)

1月:北海道 6会場(網走、枝幸、紋別、中標津、大樹、浦河)

2月:北海道 5会場(稚内、名寄、江差、函館、八雲)

3月:北海道 8会場(室蘭、帯広、釧路、北見、旭川、苫小牧、札幌、根室)

&lt;高校内ガイダンス&gt;

11月:北海道 7校(恵庭南高校、石狩翔陽高校、有朋高校、札幌拓北高校、北星学園大学附属高校、旭川大学高校、札幌新陽高校)

12月:北海道 12校(札幌創成高校、札幌北斗高校、室蘭清水丘高校、伊達緑丘高校、恵庭北高校、札幌真栄高校、札幌丘珠高校、道愛女子高校、札幌月寒高校、札幌第一高校、札幌白石高校、富良野緑峰高校)

2月:北海道 1校(士別高校)

3月:北海道 1校(苫小牧工業高校)

神奈川県 1校(立花学園高校)

千葉県 1校(敬愛学園高校)

&lt;高校訪問&gt;

11月:北海道75校、東京都7校、埼玉県6校、千葉県1校、神奈川県3校

12月:北海道231校、東京都15校、栃木県1校、群馬県1校、埼玉県1校、千葉県3校、神奈川県2校

1月:東京都8校、埼玉県5校、千葉県4校、神奈川県6校

2月:北海道128校、東京都11校、埼玉県8校、千葉県3校、神奈川県3校

3月:北海道122校、東京都1校、神奈川県4校

&lt;特別AO入試説明会&gt;

12月10日(日) 本学

3月11日(日) 本学

&lt;大学入試説明会&gt;

1月14日(日) 本学

2月25日(日) 本学

&lt;オープンキャンパス&gt;

3月25日(日) 本学

&lt;広報室来学者&gt;

12月 5日(火) 北広島西高校(大学見学会:学生35名)

1月 5日(金) 訓子府高校(教員1名)

アメリカの未来学者アルビン・トフラーが経済の大きな動きを「波」ととらえ、1980年に出版した「第三の波」で、第三の波は情報化社会と呼ばれるものであり、その中で「コミュニケーション手段がすっかり変わったのに人間だけは変化しない、ということはある得ない。メディアの革命は、人間心理を革命せずにおかない」と述べている。本学は、急速に浸透した情報化社会の担い手であるが、記事にあるような人の持つぬくもりを大切に、いいか悪いか別にして社会の変化と向き合っていきたいものである。(Y)

ななかまどVol.38 6ページの国際理解シリーズ「時空の旅人」第1回講演会開催の中で、右の段3～4行目「ケンブリッジが女性に博士号を授与した1期生のうちの一人です。」は編集の誤りでした。ご迷惑をおかけした深澤先生にお詫びするとともに以下のように削除・訂正いたします。「深澤先生はイギリス・ケンブリッジ大学出身で、ケンブリッジ大学から博士号を授与されました。」